

学会賞

## 北井聡子氏と青山忠申氏に日本ロシア文学会賞

井上幸義

### I

日本ロシア文学会賞選考委員会は、2019年6月1日に選考会議を開催し、今年度の優れた研究業績として以下の論文の筆者に学会賞を授与することに決定した。

【論文】北井 聡子 「ファルスを持つ女：長編小説『セメント』のダーシャについて」（『ロシア語ロシア文学研究』第50号所収）

【論文】青山 忠申 「『アヴァクム自伝』自筆稿のアクセントに見られる規範と逸脱」（『ロシア語ロシア文学研究』第50号所収）

なお、選考過程として、1月末日締め切りで一般会員から候補作の推薦を募り、同じく3月末日締め切りで各選考委員から候補作の推薦を募り、6月1日の選考会議において候補作の審査および選考を行った。今年度は一般会員からの推薦はなかった。著書に関しては、今回は該当作なしという結論に至った。

受賞作に関する以下の選評は、選考委員会で各委員から出された意見を井上の責任においてまとめたものである。

## II

北井氏の論文は、ラカン派の精神分析の概念である「前エディプス期」「ファリック・マザー」「想像界」「象徴界」等の枠組みを、ソビエト時代にフォードル・グラトコフによって書かれた長編小説『セメント』のヒロイン、ダーシャ・チュマーロワの分析およびその分析を通じた新たなジェンダーの産出・配分の考察に応用した論考であり、これまでもっぱら社会主義リアリズムの規範として分析されてきた小説『セメント』に対しダイナミックで新たな読みの可能性を提示することに成功している。

北井氏は、まず、ドイツ・ルネサンスを代表する画家ルカス・クラナハが描いた古代ローマの伝承に登場する女性「ルクレティア」の図像における「剣」という「ファルス」的イメージから説き起こし、そのアナロジーで論を導きながら、グラトコフの『セメント』でダーシャが被る「赤い頭巾」という「ファルス」的イメージを小説の核になるものとして取り出し、最後には「赤い旗」によるその役割交替も読み取るといった、小説の中心的イメージの抽出とその分析を軸に据えた論述を展開しており、その論旨は示唆に富み、刺激的でさえある。

伝承上のルクレティアは、夫が戦地にいる間に、ローマ王の第三王子セクストゥスに凌辱され、「体は犯されても心は潔白だ」と言い残し、短剣で自ら胸を刺して息絶える。王の圧政に不満を抱いていたブルトゥスは、彼女の胸から短剣を引き抜いて掲げ、王家の打倒を呼びかけると民衆たちによって王家は追放される。北井氏は、この短剣に「ファルス」的イメージを読み取り、同様に、小説『セメント』において白軍の二人の士官に凌辱と拷問を受けたダーシャが、その後、党の女性部のリーダーとして革命に人生を捧げ、集団全体を導くに至る過程で被る「赤い頭巾」にこの「ファルス」的イメージを読み取る。

北井氏は、ダーシャが頭につけているものを「赤い頭巾」(2箇所で「スカーフ」)と訳し、これが本論文のキーワードになっているが、原作では一貫して красная повязка (赤い細長の布切れ, リボン) である。革命の際、赤軍兵は赤い повязка (リボン) や бант (蝶結びのリボン) を腕や胸に付け、女性は赤い платок (スカーフ) を頭に被ることがあったが、女性ながら платок ではなく повязка を頭に巻くという行為そのものにダーシャの先駆性・リーダー性が象徴

されている。だからこそ、軍服に「赤い蝶結びのリボン」を付けた赤軍兵たちが、頭に「リボン」を巻いたダーシャに遭遇したとき、「赤いリボンにウラー！赤い女性にウラー！」とダーシャを讃えたのであり、ダーシャを自分たちと対等な戦士と認めたということが意味されている。「赤い頭巾」と訳すと красная шапочка и серый волк「赤頭巾ちゃんと灰色オオカミ」との連想から別のイメージを与えかねない。

北井氏は、ダーシャと表裏一体の存在としてポーリヤを位置付ける。ポーリヤはダーシャに憧れる存在であり、自分もまた革命に人生を捧げたいと願いながら、トラウマの履歴を持たないために戦う為の根拠を欠いており、その存在基盤は脆弱であるために、ダーシャと同様「赤い頭巾」(повязка)を被ってはいるが、そこに力が宿ることはなく、言わば偽物のファルスを頭に載せた存在であるという本論文の指摘は説得力をもつ。さらに、ダーシャが短髪に男物のシャツを身に着け「男らしさ」を手にしたファリック・マザーとしてジェンダーの象徴界を攪乱しつつあるのに対し、ポーリヤはジェンダーの象徴界の秩序を守るための「女」として、男達の「男らしさ」を維持することにある、というダーシャとのジェンダーを巡る存在意義における比較論は示唆に富む。

本論文では、党を肅清され廃人化したポーリヤの男性恐怖症が、ダーシャの中の「男らしさ」を消滅させ、それによってダーシャが<ファルス>を失い、<名誉男性>の地位から<普通の女>へと格下げされること、それに呼応するように、セメント工場の再稼働を果たしたダーシャの夫グレブが「赤い旗」を掴んで群衆の上に掲げて振ることによって、ダーシャが所有していた<ファルス=赤い布>が「頭巾」(повязка)から「旗」へと名称を変更する、というダイナミックなイメージの役割交替の読みを提示している。ただし、ここでも повязка が、頭全体を覆う大きな「頭巾」と捉えられ、大きな「布」が大きな「旗」のイメージと交替すると解釈されているように読めるが(あるいは、「旗」のイメージに引きずられて「頭巾」と訳したのだろうか)、повязка は布の「リボン」であり、「リボン」が「旗」へイメージ交替するという図式も成り立つだろう。

以上のように、本論文は、ラカン派の精神分析の手法を見事に文学研究に応用しており、今後の研究の発展が大いに期待できるが、それゆえに、本学会の学会

誌のような媒体においては、もう少し一般的な読者・研究者を意識したテーマの提示のしかたや論文の構成を工夫するとよいのではないかという意見が選考委員会であったことを付記しておきたい。

青山氏の論文は、17世紀後半に長司祭アヴァクムによって書かれた『自伝』の自筆稿において、アヴァクム自身が記したアクセントが規範から逸脱している現象を、「文献執筆者の主体的アクセント操作」という視点から分析したものであり、従来のアクセント論的立場からは説明困難な「逸脱」という現象に新たな方法論をもたらしうる論考である。古代・中世ロシア語のアクセント研究は、ザリズニャークが、14～17世紀に書かれたロシア各地方の方言的特徴が見られる多数の文献の統計的アクセント調査に基づき編纂した、画期的なロシア語アクセント辞典《Древнерусское ударение》を2014年に出版した時点から新たな研究段階に入ったばかりであり、本論文は、日本のロシア語研究におけるこの分野の嚆矢をなすものである。

青山氏は、アヴァクムの2種類の自筆稿のアクセント表記に関する、ザリズニャーク、コーレソフなどの先行研究を綿密に検証し、それぞれの方法論をリズム、語順などの視点から分析していく。

ザリズニャークは、アヴァクムの『自伝』の言語をロシア北東部地域の方言に分類したうえで、この地域に特徴的なアクセント体系の例外のひとつとして дефинализация（非語末化）を挙げている。非語末化とは、語末の開音節のアクセントが一音節左へ移動する現象をザリズニャークが定義したもので、たとえば, вино́ を ви́но, ѿт пяти́ を ѿт пѣти と発音する現象である。ザリズニャークは、非語末化の他に、本来的でない位置のアクセント記号として、一音節おきに韻律的強めを表す「副次的アクセント」の存在を指摘している。青山氏は、『自伝』中には非語末化も副次的アクセントも見られるが、ザリズニャークは、このような「逸脱傾向」がどのような場合に現れるかという条件を明らかにしていないとする。この指摘は正当なものであるが、用語に関して言えば、ザリズニャークは、一般的に使われる акцентные отклонения「アクセント逸脱」を敢えて避け、акцентные изменения「アクセント変異」という用語で非語末化を説明している

点に注意を払う必要があるだろう。

一方、コーレソフは、『自伝』における定語的語結合の語順とアクセントとの関係に注目し、本来の語順では標準的なアクセントが付されているのに対し、語結合内の構成要素の順番が逆転した例では例外的なアクセントが現れているという解釈を提示している。青山氏はこの定語的語結合に関する解釈を、所有代名詞と「y+ 生格」との関係に拡大し、所有代名詞同様「y+ 生格」も被限定語に対し後置語順が標準的であることを明らかにするとともに、『自伝』では、標準的なアクセント「у боярони」に対し、「y+ 生格」が被限定語の前に置かれ、かつアクセントが例外的な例として、「у бояронй кѣры всѣ занемогли」 「夫人の雌鶏は皆病気になり」という例を発見している。青山氏は、この例外的なアクセントがリズムに関わる逸脱である可能性を示唆するとともに、同じくリズムに関わる『自伝』中のアクセントの例として、バイカル湖に生息する動物の名称に付けられたアクセントを指摘しているが、これも先行研究では言及されていない新たな発見である。すなわち、『自伝』では、バイカル湖に生息する動物の名称が2種類ごとにアクセントが共通の位置に置かれているというのである。具体的には、「ガチョウやハクチョウ гѣси j лебедѣи」「チョウザメやイトウ всетры j таимѣни」「コチョウザメやオームリ стѣрьледи j вмѣли」「アザラシやアゴヒゲアザラシ нерпы j заицы」のようにまとめて列挙され、アクセントがそれぞれで共通の位置に置かれていること、その際、アヴァクムの同獄者で『自伝』を編纂したエピファニーによって修正のために付されたと考えられる標準的なアクセントの таимѣни に対し、アヴァクム自身が記したアクセントは、先行する名詞 всетры の語尾アクセントに合わせ таимѣни と語尾に打たれていることなどのリズムに関わる逸脱の現象を発見している。これらのアクセントの逸脱がこの場面の「詩的効果を高める役割を果たしている」という指摘は、読み手を意識した意図的なものという青山氏の推察を裏付けるものであり、18世紀以前のアクセント詩法を想起させ、興味深い。

以上のように、青山氏は、アクセントの逸脱という現象について、先行研究の非語末化や語順論などを綿密に検証するとともに、リズムを揃えることによる詩的効果の可能性を見出し、「文献執筆者の主體的なアクセント操作」という新た

な概念を打ち出すことによってこれらの現象の説明に成功している。

本論文は、アヴァクムの『自伝』におけるアクセントという極めて限定された資料とテーマを研究対象とするものであり、今後「逸脱の傾向の類型化」を目指すとしながら、具体的な分野や対象文献は挙げられていないが、今後の更なる研究発展が望める分野として以下を挙げることができるかもしれない。①口承によって伝えられ、教徒たちに読み聞かせることを目的とした古儀式派の説教、とりわけ教訓的色彩の強い例話におけるアクセント、②アクセント逸脱とその後の古儀式派のロシア語との関係、③ロシア北東地域の方言に見られる「安定していない非語末化（任意の形態論的グループに現れる非語末化）」とアヴァクムの言語との関係、④18世紀後半に確立した音節・アクセント詩法とは異なる、アクセント詩法、とりわけ、フォークロアの韻文ジャンルであるプイリーナのリズム法とアヴァクムの詩的アクセントとの関係等々。

(いのうえ ゆきよし)